

FINANCIAL HISTORY

---

1720 · BUBBLE · MADNESS

# 南海泡沫事件

---

半年で株価10倍。そして崩壊。「天体の動きは計算できるが、人の狂気は計算できない」 ——  
アイザック・ニュートン

---

投資と思考の書齋

<https://anni-memo.github.io/investment-library/>

#### WHAT HAPPENED

## 何が起きたか —— 半年で10倍、そして崩壊

1720年、イギリスの南海会社（South Sea Company）の株価が異常な暴騰を見せた。年初に128ポンドだった株価は、6月には1,050ポンドに達した。半年で約10倍。ロンドン中が投機熱に浮かされた。

しかし、その年の秋には株価は急落し、多くの投資家が破産した。科学者アイザック・ニュートンも2万ポンド（現在の価値で数億円相当）を失ったと伝えられている。

万有引力を発見した天才でさえ、群衆の狂気には抗えなかった。

---

#### WHY IT HAPPENED

## なぜ起きたか —— 政府債務・インサイダー・賄賂の連鎖

南海泡沫事件の本質は、政府債務の株式化スキームにあった。

スペイン継承戦争（1701-1714）で膨らんだイギリスの国債を、南海会社が引き受ける。投資家は国債を南海会社の株式に転換できる。会社は南米貿易の独占権を持つ —— という触れ込みだった。

- 南海会社の取締役たちは、株価を吊り上げるためにインサイダー取引を繰り返した
- 議員や閣僚に株式を贈り、法案の通過を確保した
- 実際の南米貿易はほとんど利益を生んでいなかった
- 株価の上昇自体が、さらなる株式転換と投機を呼ぶ循環が生まれた

政治と金融が癒着し、虚構の上に虚構が積み重なる。これがバブルの典型的な構造である。

---

#### WHAT CHANGED

## 何が変わったか —— 泡沫会社禁止法の制定

南海泡沫事件は、バブルが規制を生んだ最初の事例となった。

崩壊後、イギリス議会は1720年に「泡沫会社禁止法（Bubble Act）」を制定した。王室の特許状なしに株式会社を設立することを禁じたのである。

この法律は、結果として約100年間にわたりイギリスの企業設立を厳しく制限した。産業革命期には、この規制が逆に経済発展の足かせとなったと指摘されている。

規制は過剰投機を防ぐためのものだったが、イノベーションも同時に抑制した。この「規制のジレンマ」は、300年後の現代にも通じるテーマである。

---

#### WHAT REMAINS

## 今に残るもの —— 「バブル」という言葉の起源

南海泡沫事件は、金融市場における「バブル（泡沫）」という概念を人類に刻みつけた。

- 投機と投資の境界 —— 実態のない「物語」に群がる行為は投資ではない
- 政治と金融の癒着 —— インサイダー取引や政治家への賄賂は、現代でも繰り返されるテーマ
- 規制の必要性と限界 —— 市場の自由と投資家保護のバランスは永遠の課題

チューリップ・バブル（1637年）、南海泡沫事件（1720年）、そして現代の暗号資産バブル。人間の投機衝動は、300年経っても本質的に変わっていない。

---

#### FOR INVESTORS

## 投資家にとっての意味 —— 天才でもバブルには勝てない

ニュートンの失敗は、知性だけではバブルから身を守れないことを示している。

- 群集心理は合理性を圧倒する —— 周囲が儲けているとき、冷静でいることは極めて難しい
- 「一度売って、また買い直す」が最も危険 ——  
ニュートンは早期に利益確定したが、周囲の続騰を見て再参入し、大損した
- スキームの複雑さは危険信号 —— 仕組みが理解できないものに投資してはならない

バブルの最大の教訓は「自分は例外ではない」ということだ。天才物理学者ですら例外ではなかった。

---

#### KEY TERMS

## 関連用語

<https://anni-memo.github.io/investment-library/>

投資は自己責任です。このサイトの内容は情報提供を目的とし、投資助言ではありません。